
秘密結社の日常的侵略行為

山咲 祐継

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密結社の日常的侵略行為

【Nコード】

N5669X

【作者名】

山咲 祐継

【あらすじ】

素人な私の初めての作品です

全力は出します、しかし過度な期待はしないで欲しいです

そんなこんなで頑張っていこうと思います

あらすじ

なんでもないただの独身男が事故った、結果改造人間になっちゃったっていう・・・

そんな話

過程が気になる方はどうぞ見てって下さい

出来れば気にならない方も一回くらい見ていつて下さい

1『テンションに身を任せると・・・死にます』(前書き)

初めての投稿になります

感想をいただけたらとても嬉しいです

それではどうぞ 行ってらっしゃいませ

1『テンションに身を任せると・・・死にます』

目に映る物がそれなりの速さで背後へと流れていく

高校時代を買ってから5年 大事に乗ってきたスクーターで山道を疾走する

3年前に出た田舎に帰るためだ

理由は不況の煽りをくらった とだけ言っときます

都会で感じることの多かった 閉鎖的な感覚から解放されたような感慨を感じる

だからだろうか

時々見かける速度規制の看板を無視してしまったのは

スピードを上げること、ストレスが発散される気がして気持ちがいい

辺りは田舎特有の自然豊かな山々が見える

だんだんと気が大きくなり始めたころ 山道のカーブに差し掛かった

しかし スピードは落とさない

いけると思ったんだ だから逆にスピードを上げた

「ヒーハー！！ イニシャルD…スクーター版だああ！！」

ここで一つタネ明かしでもしましょう

俺は案外バカ野郎です

どれくらいかって？ そうですねえ・・・

「ウギヤアアアア！？ 調子乗りすぎたああ！！ 俺の大バカ野郎オオオ！！」

飛ばしすぎてガードレールから飛び出すくらいには・・・

現在 山道の急カーブを曲がりきれず相棒（中古スクーター…口
ン有り）と共に落下中

眼下には鬱蒼とした森林が迫ってる・・・

「ヤバイね！ こりやまじでヤバイ！！

人生生きてきたなかで一番ヤバイよ！？

いやもうヤバイなんてもんじゃなくヤヴァッ……！！」

着地に・・・

見えなくもないと思う

着地？ の拍子に身体中からバキゴキツとしたイヤゝな音がした

多分折れたんだろう いろいろと

不思議と痛みが無い代わりに体が動かない

「……ガッハ!?」

声を出そうとしたら咳き込んでしまった

おまけに さっきまで全く無かった痛みも一気にきた

けっこう重傷っばい 血も出てるし

骨が肺にでも刺さってんのかもしんない っていうか超痛い

マズイな……早いとこ病院に行かないと死ぬかも 超痛いし

「……っが! ……ゲホ!」

と言う訳で 助けを呼ぶ為 声出しに再度チャレンジ

しかし 咳き込むだけで声は出ず

あゝ だんだん頭がぼーっとしてきた

つか今更ながら 此処って山の中だし人通り少ない田舎じゃん
声出せても人に届く確率が絶望的なのを忘れてた

もうまともに頭も働かないみたいだ

視界の端にチラチラみえるガラクタ・・・元相棒（元中古スク
ーター）の姿が絶望に悲愴感をプラスする

「ゲホ！ ゴホツゴポツ！？」

咳きと共に大量の吐血

本格的にヤバイ

目が霞んできやがった

体が氷みたいに冷たい

それに さっきまで超痛かったのに今は痛くない それどころか
何も感じない

自然と一つの可能性が 頭の中をよぎる

これはアレかな？ 『死ぬ』ってヤツかな・・・？

普段 考える事さえ無い単語が徐々に現実味をおびる

オイオイ 死ぬのか？ ここで・・・

俺が？ 冗談だろ？

本当に・・・？

こんな所で？

死にたくねえ・・・

やっぱ 死にたくねえよ

やりたい事たくさん有るんだぜ！？

まだ初体験どころかキスさえしたことないだ！！

彼女が出来た事さえないんだぞ！？

嫌だ・・・こんなの

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だイヤだイヤだイヤだ死にたくない
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない
シニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイ
シニタクナイ・・・！！

・・・ま・・・だ

「じにだ...ぐな...い...！！」

俺の魂の叫び 全く声が出ていないが今の俺の全力だった

ガサツ・・・

！？

その声が聞こえたのか 自分に近づく落ち葉を踏む音が聞こえた

視界がほぼ完全に暗くなりかけているせいで そちらを確認することは出来ないが 間違いなく何かがすぐそこにいる

ガサッ・・・

人なのか熊なのか・・・

そこまで考えたところで俺の意識は完全に途切れた・・・

1『テンションに身を任せると・・・死にます』（後書き）

お帰りなさいませ

ここまで読んでもらえただけで十分嬉しいのですが・・・

出来れば感想が欲しいところです

お手数ですがどうかよろしく願います

次回の投稿が何時になることや分かりませんが 次回にお会い
しましょう！

ではでは！！

2『生きていたみたいです』（前書き）

2話目です

慣れるまでまだかかりそうです

それまでお付き合いよろしくお願いします

それでは 行ってらっしゃいませ

2『生きていたみたいです』

「……うん むう……まぶしっ」

顔に当たる強い光で目が覚めた俺

いつの間にか寝ちまってたみたいです

あゝ 随分寝てたみたいなのがする

「んっ……」

おかしいな

首が動かん

っーか 指先の感覚さえ無いぞ

つまり全体的に体が動かないんですけど

「こーゆつのは……まさか」

か・・・金縛りとか？

イヤイヤ無い無い無い絶対無いね

そんなんアレだもん 非科学的ってヤツですもん

バリバリの現代っ子 言わばコンピューター世代の俺はそんな
に騙されたりしないんじゃないもん

テンパり過ぎて 何か言葉づかいとかおかしくなってる気もする
が・・・

とつとにかく！ 金縛りとか絶対あり得ないから

はい！ この話はもう終わり！！

冷静に 落ち着いて・・・

しっ深呼吸して

スーハースーハー・・・ゲホッゴホッ

若干・・・というか

かなりびびりな俺です

〽1分後〽

大分落ち着いたぜ

少し動いてみるか

と言っても動くのは・・・

どうやら 目と口だけのようだ

仕方ないので動く目を最大限に活用する

ふっ 問題無い この俺の推理力があれば今の状況を知る事など
朝飯前だっ

ポク ポク ポク ポク チーン……

……唯一の情報源によって得られた情報から推測する

しばし黙考

・
・
・

俺の寝てるこれ・・・手術台じゃね？

いやいやいやいや さっきからなんなんだよ？ どんだけだよ？
これは悪夢か？

まだ夢の中ってか？

・
・
・

つか どうかで見た事あんぞ

これは・・・

！

「…まさか……シヨッ〇ー？」

いや…デストンか？ 或いはデル〇ー？

などとシリアスな風を装って馬鹿な事を考えている俺

仮ライダーはブラックとクウガが好きだった

「最近のライダーはウケ狙い過ぎてあまり『やっつと目覚めたか
！……！』」

！？

突如響いた大声量に びびりな俺は当然びびる

だが 謎の金縛りのおかげで 俺がびびりなのはばれてないはずだ

普通ならビクツとして手術台から転げ落ちたあげく テーブルの下
までスライディングする勢いであろう

謎の金縛りグッジョブ！！

・ ショッ○ーのくだりとか 聞こえてないともっと嬉しいんだが・

「博士 いきなり叫ばないで下さい。」

……それと我々はシ○ツカーではありません」

？

次に響いたのはさっきとは違う 落ち着いた感じの女性の声……

どうやら死角に居たらしい

全く気付かなかった

しかも ショッ○ーのくだりはばっちり聞こえてたみたいです

死にたくなってきた……

・
・
・死？

あっ！？

思い出した！！

なんで！？？

「俺生きてる」

2『生きていたみたいです』（後書き）

お帰りなさいませ

感想をいただけたら嬉しいです

次話も出来るだけ早く投稿できるよう頑張ります

すみません 嘘です まったりいきたいです

それでは次回にお会いしましょう！

ではでは！！

3『あれ？ 俺ってこんなに口数少なかったかな・・・』（前書き）

3話目です

とりあえず言い訳をさせて下さい

忙しかったので投稿遅れました！

本っ当にすみませんでした！

違うんです あのテストのヤツが本当に面倒臭くって

以後気をつけますんで許して欲しいです

それではどうぞ 行ってらっしゃいませ！

3『あれ？ 俺ってこんなに口数少なかったかな・・・』

「俺生きてる」

おかしいな どうしたことだ

ペンギンの帽子かぶったり

生存戦略！ って叫んだりした記憶はないんだが

あれ・・・

つまり俺

死んでないんじゃない？

「ってことは…… 助かった……？」

完全に死んだと思ってました

独り言がつつい漏れてしまっうほど啞然としていと

「当然なのだよ!!」

という

やたら元気な返事が返ってきた

先ほど俺をびびらせた大声量と同じ声だ

不覚にもまたびびってしまった

「完成ですね」

そんな言葉と共に手術台に寝かされてる俺には見えない位置から
大小二人の人影が出てきた

人影をよつつく観察した結果二人とも女性のようだ

おそらく先ほどの声の主達だろう

明らかに丈の長すぎる　大きめの白衣に腕を通した活発そうな少
女と

漆黒のスーツをかつこよく着こなした　秘書っぽい大人の女性だ
った

「
」

白衣の少女は中学生くらいだと思うが 茶髪をツインテールにしてるせいでかなり幼く見える

そしてこちらは

「
……」

肩口で切り揃えられた黒髪が知的な雰囲気を漂わせる ザ・秘書
ってカンジの人なんだが……

「……何か？」

あれ 何だろう……スゲー怖い

びびり君センサーがピンピンに反応してるし

何より視線に寒気を感じる

超怖い

やっぱりアレか？

じろじろ見てたのが気に入らなかったってことか？

「いやあの……あ　あまりに綺麗だったんで　つい……」

とりあえず謝りながら

ご機嫌をとる

だからそんな目で睨まないで下さい

お願いしますから

いい加減ヤバイですよ

主に俺の涙腺が決壊的な意味で

くっ　限界が……近い！

などと秘書っぽい人と無言の攻防？　（俺の中だけ）をやっている
と

「ふっふっふっ　なるほど……」

何故か突然笑いだした白衣の少女

どうした

電波でも受信したか？

このタイミングで厨二発症か？

「博士？」

心なしか秘書っぽい人も心配したような声を出す

「なるほどな……」

まるで深く納得したかのような声で 白衣の少女が小さく呟いた

その口は怪しげに笑っている

何が『なるほど』なんだ？

「私のこの美貌に魅せられたのだな！！」

瞬間 白衣の少女が叫んだ いや吠えた かな？

どちらにしろ それほど広いわけでもない部屋の中ではやめて欲しいです 耳がキーンとします

・・・

まあ あれだな どうやら俺のお世辞に反応したらしい

お前（お子様）には言ってねえって

なんというか・・・

この娘アホっぽい

「……………」

秘書っぽい人もどこか諦めたような表情してるし

あつ　目が合った

いつもこんな感じなのだから

疲れた顔をしていらっしやるので

とりあえず大変ですねえという意味の視線を送ってみる

「チッ

……………問題は無いようですね」

舌打ちが返ってきた

余計なお世話だ的なカンジかな・・・

もしかしなくても俺嫌われてる？

「畏縮するのも無理はない！　私の美しさはもはや兵器のレベルだ

からな！」

・・・何か変なスイッチが入ったらしい

自信に満ちた笑顔で延々と自分を誉め称えている

この娘はアホの子かもしれないな

・・・マジで止まんない

おい帰ってこい！

ぜんっぜん話が進んでねえ気がする・・・

3『あれ？ 俺ってこんなに口数少なかったかな・・・』（後書き）

セリフって難しいですね

いろいろ修正したら主人公のセリフが少なくなってるって驚きました

キャラの性格も大幅に変わったり

まだまだ素人以下の自分ですが頑張っていきますんで

応援お願いします！

それでは！

4『それでも俺は人間です』（前書き）

4話目投稿します

基本的に不定期更新になります（、・・、）

何かいろいろとすみません！

慣れるまでもう少しお待ち下さい

まったりいきましょう！

それではどうぞ

4 『それでも俺は人間です』

あれから1分くらいの時間が流れましたが

話が進まないです

何故かと言うと・・・

『完璧過ぎる私のうんたらかんたら……
そもそも私の美しさはどうたらこうたら……
宇宙の神秘があぶらかたぶら……』

白衣の少女に全く止まる気配が無いんです

ていうか宇宙の神秘で

・・・

いやいや 違って

今そんな気にしてる場合じゃないじゃん

今一番気にしなくちゃならんのは

「ここどこ 俺 なんで生きてんの？」

これよ

俺的にこれが一番気になる所

「こいつはいったいどういう……」

思わず口から出た疑問だったが

意外な所から答えが返ってくる

「……研究に都合のいい“物”が落ちていたので拾っただけです
勘違いしないでください」

意外っちゃ意外 秘書っぽい人だった

答えが返ってくるとは思っていなかったから独り言のつもりだったんだが

あつ 因みに ツンデレ乙って思った良い子の皆々！

絶対勘違いしちゃダメですよー！

この人の目は本っ当に俺の事を“物”としか見てないからねー！！

・・・悲しいけどこれって現実なのよね ていうか 俺 何か悪い事しましたかね？

何も悪い事した記憶が無いのにこの扱い 酷いと思いませんか？

あれ おかしいな？室内なのに雨が降ってやがる

ハハッ この雨 しょっぺえや

とまあ・・・ふざけるのはこれくらいにしといて

何か秘書っぽい人が研究とかなんとか言ってたが

何の研究だろう？

今の俺の体が動かない状況から察するに・・・人体実験？
・
いやいや恐らくただのジョーク的なものだろう

きつとそうに違いない

・・・限りなくブラックに近い類のジョークさ！ ハッハッハッ

つまりあれだ 今の状況を整理すると あの後俺は彼女達に助け
られたということでもいいのだろうか？

俺が森に倒れている所を彼女たちが見つける

保護

手当て　の流れかな

なるほど　それなら説明がつく気がする

さっきまでの冷たい態度はただの口下手　それか照れ屋さん

そうだ

そうに違いない！　と思いたい　俺がいる

なんだ結局はいい人達じゃね？　説を信じるぜ！！

だとしたら礼を言わねばなるまいな

しかし　何故体が動かんのか

もしかしたら麻酔でもかけたのかもしれないな

などと考えていると・・・

「体が動かないのは まだ機械化に馴染んでないからです」と秘書っぽい人がおっしゃられた

・・・？ きかいか？ キカイ力？

あつ 機械化？

ふつ 何を言い出すかと思えば・・・

あんたも不治の病ちゅーにびょうの人か・・・

「お嬢ちゃん 大人をからかうのは良くないごめんなさいすみません許して下さい」

言った瞬間ものすごい形相で睨まれた

例えるならモンスターをハンターするゲームのティ○レックスだ

超恐ええ

「信じられないだろうな ならば見るがいい もはや私の作品となったその体を！」

さっきまでha ha ha! ha ha! ha! って高笑いしてた

のに

いつの間にか自己陶醉の世界から帰ってきたイタイ子がまた声高々に吠える

ほとんど空気と化していたな・・・

「ポチッとな」

少女がわざとらしく口に出しながら

何かりモコンのようなものを操作すると 自分の体の上にデカイ鏡がせりだしてくる

おかげで手術台に乗った自分の体が良く見える形だ

「マジか……」

思わずこぼれたこの一言が今の俺の気持ちすべて物語っている

鏡に映った自分を凝視する

指先の感覚なんて無い筈だ

そこに見えるのは・・・

手足の無い自分の姿！？

おまけに首から下は機械的な光沢を放っている

「ご自分のおかれた状況が判りましたか？」

秘書っぽい人が何か言ってるけど ぜんぜん耳に入ってこない

放心中の俺

かろうじて口からもれたのは

「うそん……」

そんな現実逃避の一言でした

ていうかこれ

やっぱ○ヨッカーじゃん

イーッ！

4『それでも俺は人間です』（後書き）

キャラが私の手から離れて動きます！

全く言う事を聞きません！

どうしたらいいの先生！？

つてな状況です

安定しねえです はい

いや 原因は分かっているんですよ？ ひとえに私の実力不足が招いてる事態なんですよ……

話もそろそろ動きだしますので

どうぞ次も見てください

まあ 次の投稿が何時になるのか全く分かりませんが

次回にお会いしましょう

それでは

5『キャラ作りには一切の妥協も許されない』（前書き）

5話目 投稿します！

やっぱりコメディって難しいですね・・・

これから精進しようと思いますので

応援して下さいとすごく嬉しいです

それではどうぞ 本文に行ってらっしゃいませ

5『キャラ作りには一切の妥協も許されない』

やあ！ 良い子の皆！

教えて お兄さん の時間だよ！！

まずはこのコーナーの説明をするよ！

ここは最近良くあるような 皆からの質問にお兄さんが答えるなんてものじゃなく

お兄さんの質問に皆が答えるというシステムを採用した

反面教師系 超他力本願な全く新しいコーナーだよ

主にお兄さんの精神的安定に活用されるコーナーさ！

良い子の皆はお兄さんの精神ココロを守る為に全力で答えるように！！
わかったかな？

悪口とか言われちゃうとお兄さんが天井に吊るしたロープを輪っかにして遊び始めちゃうから 皆 お兄さんには優しくしてね

それでは！！

皆に質問です！

ドウシテコウナッタ？

現在 俺 現実逃避中・・・

頭の中では どこかで見たことあるような子供番組が 面白おかしく陽気に歌い始めているが

視線は鏡の中のメタルボディに釘付け

それも仕方ないと思う

日常 馴れ親しんだはずの 貧相とまではいかないまでも平均的なマイボディが ちょっとと見ない間に言葉では言い表せないくらい大変な事になっているのだから・・・

例えるならば・・・優しくていい子だった息子が 嫁さんと離婚して2年後くらいに会って見たら世紀末覇者みたいな不良になっていた

そんなカンジ・・・

あ 息子って別に下ネタじゃないよ？ あっちの息子じゃないから勘違いすんな

まあ アレだ・・・

とにかく洒落にならん

変わり果てたマイボディを前に俺が言葉を無くしていると

再び天井に格納されていく鏡
気の抜けたような スウィーン という音が俺の心中とはなんと
もかけ離れた間抜けなものに聞こえる

が それと同時に

放心していた俺も現実に戻される

「どうだ！ 私が自ら設計&改造をした新しい身体は！？ 勿論
まだ完成というわけではないが 私の自信作だ！！」

そして 現実逃避から復帰したばかりの俺の耳に届いたのは
はり 白衣の少女の能天気ボイスだった

まるで子供が自慢をするかのような声だ

身体中から『ほめて ほめて』みたいなオーラを出している

確かに普段の俺ならその子供ならではの愛らしい姿に ついつい
頭を撫でくりまわてしまっているところだったろう

しかし 今の俺はこの超絶能天気なお子様を校舎裏に呼び出した
いイジメっ子の気分だ

覚悟するがいい 俺様の黄金の右が火を吹くぜ

体が動くようになったらね・・・

しょうがないから目で不満を訴え 口で不服を伝える事にする

「なんていうか あんまり嬉しくないっていうか……（中略）……
正直 迷惑なんだけど」

とりあえず 延々文句を言っただけ

（ちなみに秘書っぽい人は我関せずを貫いている）

すると どうしたことだろうか？ さっきまでのマッドサイエンティストなノリから一変

五月蠅かった白衣の少女は急に大人しくなった

少しは反省してくれたのだろうか・・・

「.....ぐすっ」

・・・ぐすっ？

「ぐすん.....」

しまった！ やり過ぎた！ 白衣の少女が涙目になっとる・・・

な 泣くのか！？ マズイ！ 子供のあやしかたがわからん！！

「うう.....でもでも あのままだったらどーせ死んじゃってたわけだし だから そんなに睨まなくても.....」

あれえええ！？ キヤラ変わり過ぎだろ！？ さっきまでの能天気
ガールは！？ そっちが素なの！？

「…………ぐすつ…………ふええ」

白衣の少女が言い訳をしながら半ベソをかき始める

涙腺から滲み出た涙が零れるまで 秒読み状態だ

3

2

い「わ わかったから！ わかりましたから！！ ちょっ！？
泣くのは勘弁して！ 謝りますから！！」

俺は悪くないが 全力で謝る

さすがに女の子を泣かせてまで許さない程 鬼じゃないです

・・・てゅーか

女の子を泣かすという行為に腰が退けてしまう小心者なだけです
けど

「こ 今度から気をつけてね？」

出来るだけ優しく声を掛ける

まだ涙目ではあるが持ち直したようだ

しかし さすがに先ほどまでの元気は白衣の少女には無い

完全に落ち込んでしまったようだ・・・

その姿に擬音を付けるとすれば しよぼーん が一番合っている
だろうか

・・・とにかく やっと落ち着いたというわけだ

はぁ 泣きたいのは俺の方なのに・・・

しよぼーん・・・

喉元過ぎれば熱さ忘れるという諺の通り

熱さを忘れた白衣の少女が メタルボディについての自慢兼説明
を元気に始めた頃

俺は足り無い頭をフル回転させて 元に戻る方法を考えていた

ひととおり冷静に考えた結果 ひとつの仮説を思いついた

「もとに戻すこととか出来ないのか？」

改造できるならその逆はどうなのか？　ってことだ

少なくとも　俺の知る限り人体改造　それもフル改造なんて　世界最先端の技術でも出来るかどうかってところだ

つまり　それだけの事をやってのける連中なのだから　逆に元の体に戻す事も出来るはずなのだ

多分・・・

「えゝカツコイイのに」

『出来るよね？』　イエスッサー！！

このアホの子はさっきまでの出来事を　全て忘れてしまったようだ

だから（鬼のような）笑顔の（ドスの利いた）優しい声で　もう一度尋ねると　軍隊式のとても良い返事が返ってきた

別に怒ってません　ちょっとイラッとしただけなんです

・・・だから　そんなに青ざめた顔でガタガタ震えるんじゃない

傷つくじゃないか・・・

後に　和解した白衣の少女から聞いた話だが　俺自身に睨んでいるつもりが無くても　俺の目はとても怖いらしい

鋭いとか眼力がある訳ではなく 例えるならば 深い闇に見初められていたような感覚らしい・・・

ハハッ 厨二っ

・・・それはともかく 案外早く元の体に戻れそうだな

良かった 良かった

・・・

アレ もう一人居たような気がするんだが

いつの間にか 秘書っぽい人は室内に居なくなっていた

もしかしたら ここから見えない位置にいるのかもしれないが
そんな気配はしない

どこか行っただろうか？

5『キャラ作りには一切の妥協も許されない』（後書き）

・・・なんですかね？

キャラが本っ当に言うこと聞きません

好き勝手に動きます・・・

どんどんストーリーが変わっていきます

すみません 言い訳です

何度も言うようですが 私の実力不足が原因です

そんなわけで次話投稿がかなり遅くなることが なきにしも
あらず・・・

とにかく がんばります

それでは 次回にお会いしましょう

6『馬鹿は馬鹿なりに一生懸命馬鹿な人生歩んでるんです！ 馬鹿にしないでく

6話目投稿しまーす

いやいや 前の話から若干日数が空いてしまいました

申し訳ないです

別に時間を掛けたから その分面白くなってるとかは無いです

いや ホントすみません

とまあ こんな作品でも見てくださっている方がいるのかどうか
分かりませんが

53

一段落するまでは終わりませんので どうかお付き合い下さい

不備がありましたらお申し付け下さい ちゃっかり直しますんで

それでは6話目です どうぞー

6『馬鹿は馬鹿なりに一生懸命馬鹿な人生歩んでるんです！ 馬鹿にしないで！』

ガシヨーン ガシヨーン

秘書っぽい人の姿が見えなくなって数分・・・

「おおっ！ ちゃんと歩けてる！ 凄いなこれ！」

ガシヨーン ガシヨーン

俺は今 白衣の少女と比較的良好な関係を築きつつある

ウィーン ウィーン

「すごいでしょ！ えへへへ・・・は！？ ごほんごほんつ！
！ なっ何を言う！ 当然ではないかつ！！ はっはっはっ！！」

見てのとおり この白衣の子はそれほど悪い人では無かったようだ

キャラ作りのボロを高笑いで誤魔化す白衣の少女

本名 梨理華・リル・メリー・リルリ・リリアーナ・カリスと言
うらしい

最初に名前を聴いた時は ゲシユタルト崩壊を起こすくらい“り”
”という字を使いすぎだろうと思いました

おまけにハーフとのもので 名前が長いからそんなの憶えられるわけが……いやいやいや 大丈夫…… のはず

「……ハッハッハッハ！ クツクツクツク！ ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

ウィーン ガチャン

キャラを取り繕う為に始めたはずの高笑いのせいでキャラ作りがほころび始めてキャラを見失いかけている白衣さん

だが話してみると なかなか話の分かる素直な子 という印象を受ける

「仮面ライオン」というよりは…… オミーターってとこかな？」

キャラを取り繕うのに必死な白衣さんを横目に自分の首から下メタルボディを再び観察してみる

それは 一昔前の変形合体ロボットみたいなガチャガチャした見た目ではなく 装甲と言って余りある頑丈そうな外殻を持ちながらそれでいて しなやかな無駄の無い無駄な造形美すら感じるメタルボディだ……

ちなみに さっきからガシャガシャウィンウィンやってんのは機械の手足を付けた俺です

なんでも機巧義肢オートメイルっていうらしいです・・・

いやいや本当に梨理華・リル・リル・リ・・・リリル？　リラ？

えーと・・・白衣さんは厨二が好きだなー　ハッハッハッ・・・

え？　なんで名前で呼ばないのか？　それはあれですよ・・・
機関の妨害的なあれです・・・　失礼な　僕が名前を忘れるなんて
最低な事するわけ無いじゃないか

なら名前を言ってみろ？

・・・ふっ　いいだろ俺の驚異的な記憶力を持つてすればそんな
事　造作もない・・・クッ　グアッ！？　機関の妨害か！？　白衣
さんの名前を思い出そうとすると機関から受けた古傷が痛む！　機
関めゝ未だに私の記憶を消したがつているということか！　まあそ
んな訳で　いやー　残念だ　本当なら直ぐに思い出すのになゝ
本当に残念だゝ

機関ってなんだ　って？

クリスティーナよ　あまり細かいことは気にするものではないぞ
！　ハッハッハッハッ！！

・・・

すみません 取り乱しました」

ガシャーン ガシャーン

・・・まあそんなわけで 元に戻るみたいだし どうせなら今の状況を楽しむ方が良くないかと思ひまして

それに 人生の中で改造人間になれるなんて体験 滅多に出来ないからね 多分

ガキョーン ガキョーン

「くつくつくつ… ターミネー〇ーか 確かにデザインは似てなくもないがな 勿論そんなものとはレベルが違うのだよ！ 何故ならば！ その体には私の創り出した全く新しい形態のエネルギーコアを採用しているからだ！！ 凡人の頭でも理解できるように話してやる良く聞かいいい！ そもそもにして 従来のコアでは アニメやマンガの様に人間型に固定した場合での エネルギーの備蓄量や動作時のパワー変換効率がかなり限られてしまう！ だがしかし！！ 私はそれら二つの問題点を解決する 画期的で天才的な方法を発明したのだ！！」

しごく自慢気に話す 白衣さんのこの口調はキャラ作り 時々ボロが出る

素のキャラと違い過ぎて不自然だ

だが 見かけによらずというか何と云うか 白衣さんはかなり頭が良さげだという事が分かった

「空間多元論を応用し作り上げた私の自信作 その名も『^{カオス・}亜空間ボット機巧』だ！ ふうふう 『亜空間機巧』が何か知りたいだろう？ 遠慮はするな！ 顔に書いてあるぞ？ 知りたいんだろ？ そうだろう！？ そこまで言うならば仕方ない教えてやろうではないか！！ まずはその原理からじっくり……」

発言の節々にあるイタイ台詞やら子供っぽい言葉づかいやらが気になるもの

まるで このメタルボディを造ったのが自分であるかのような言い種といい

秘書っぽい人に『博士』と呼ばれていることといい

このメタルボディは十中八九白衣さんが造ったものだろう

少なくとも 白衣さんが俺よりは頭がよろしい事はよく分かった

しかし 白衣さん 凡人にも理解できるように話して下さいのはなかったのですか？ 凡人の俺が全くついていけないよ？

・・・なにはともあれ 思ったより早く元の体に戻れそうなのだ

過去は忘れてポジティブシンキング 今この時を全力で楽しもう
と思います

「博士？ 話は済みま……」

いつの間にか部屋から消えていた秘書っぽい人が これまたいつ
の間にか部屋の中に現れた

「…何を……しているのですか？」

居ないと思っていた人間に死角から声をかけられれば 勿論 び
びりな俺はそのスキルを余すこと無く発揮する事になる

秘書っぽい人の一言にびびり倒した俺の緊急避難行動……

具体的に言えば そう 目の前に居た白衣さんに抱きついた形で
ある

ミシッ……

秘書っぽい人が持っていたペンのような物が軋む音がした

……死んだな

いやいや 落ち着け俺 誤解だ誤解を解くんだ 話せば判るさ
人間だもん まずは歩み寄る事が大切ですよ

「違うんです これは事故 そう 不幸な事故なんですよ」

「……………」

出来るだけわざとらしい印象を与えないよう冷静に語りかける
が ペンを粉碎した秘書つばい人の右手がパキポキと骨を鳴らし始
める……

ヤベエな もはや不機嫌オーラなんて可愛らしいものじゃねえ
殺意の波動と化している

「……………さい」

「……………え？」

秘書つばい人が何か呟いたようだがよく聞こえなかった

「……………れなさい」

「……………？」

…… 時が経つにつれて波動が大きく……

「離れなさい……」

「へ？ ……あつ」

あー・・・ そうですよー 分かりました まずは 白衣さんから離れた方が良くってことですよー

「あははっ すみませんでした」

秘書っぽい人を刺激しないよう そつと離れる俺

しかし そんな俺に突き刺さるのは デスビームも真っ青ってくらい鋭い秘書っぽい人の視線・・・

赦す気は無いつてことですかねー

とてつもない命の危険を感じる いったいどうしたら良いんだ

！ そつだつ

白衣さんならこの誤解を解くことが出来るはず

白衣さん！ 助けっ・・・あれ

「あわあわ／＼／＼」

目線で白衣さんに助けを求めるも　それどころじゃ無さそうだ

てゆうか・・・　完全にキャラ作りの面が外れとる

「ちょっ！？　しつかりしてくれよ！？　頼むから！　頼みますから！　帰って来ーい！！　うわっやべえ！　（ドス！）　ぐぼあ！　！？」

・・・俺の意識はそこで途切れたのだった

・・・

後日　白衣さんから聴いた話だが　意識を無くす前に響いた鈍い音は　どうやら秘書っぽい人の踵落としが炸裂した音だったらしい

ちなみに秘書っぽい人の名前はレイリって言っらしい・・・
漢字で書くと冷李だ

まあ　どうでも良いけど・・・

あれ？ 俺はいつたい・・・

なんだ？ ここ何処だよ・・・何か最近この台詞多いな

あつ ちょうどいい 人だ

あのー すいません ここ何処が分かりませんか？

『キヤバクラ 冥土in黄泉』？ なんだそりゃ

って じいちゃん！？・・・何で生きてっ・・・ああ もし
かして俺死んだのか・・・？ だから冥土ってか・・・

ダジャレかよ

まあ良いや 元気だった？ はおかしいのか？ なんて言えば良
いんだ？

つか 何してんだよこんなところで・・・

さつきからソレ何飲んでんの？ 毒々しいくらい真っ黒なんだけ
ど・・・

酒！？ ソレ酒なの！？ てゆーかあの世に酒！？

マジかよ・・・ 俺ももらって良い？

・・・あつ 美味しいな・・・

そういえば ばあちゃんと仲良くしてる？ ばあちゃんもここに
にいるんでしょ？ ケンカとかしてない？

え？ 日常茶飯事？

なんでさ？ 仲良くしなよ

・・・

ああ そりゃばあちゃんもキレるわ

当たり前だよ このエロじじいが

え？ 何？ 時間？

何の？

え？ 此処にいられるタイムリミット？ なんでだよ？

もうちょっと良いじゃん・・・

わかったよ わかったって しつこいな・・・ もう帰るよ

じゃっ またな じいちゃん

機会があつたらまた来るよぶおあ!?

「ぐはあっ!!」

「うわっ!?! 気がついた!?! えっえ」と……なっ何か百面相してたけど… 楽しい夢でも見てたのかな?」

目を開くと白衣さんの心配しつつも何故か慌てた様な声が聞こえてきた

ちなみに冷李さ… 秘書っぽい人は白衣さんの後ろに控えてる

ヤベエよあの人… だって声に出して無いのに名前呼んだ瞬間 例の波動を感じたぜ…

これから秘書っぽい人でいこう

「?」

白衣さんが首をかしげている

「…ん？ ああ 死んだ筈のじいちゃんとキヤバクラで飲む夢を見たんだ また来るついたら百年早いつてぶん殴られたけど」

あのクソジジイ 死ぬ間際に 背後霊となつてお前を見守るとか宣言してたくせに キヤバクラ通つてやがった

生前から破天荒な年寄りだったからな

あの様子だと ばあちゃんも苦労してんだろ

「…へへ」

白衣さん 聞いたいてその反応はおかし…

…何かおかしいぞ

白衣さんと目が合う度に反らされる

明らかに変だ

「白衣さん？」

「……サッ」

まるで子供が親に隠し事をするかのような反応だ

俺が寝てる間に何かしたのか？

「…ジッ 何か隠してない？」

ビクッ！

「そ そそそんなことはい……」

急にアワアワし始める白衣さんが 後ろに控えてる秘書っぽい人に助けを求めるような視線を送る

それに対し 秘書っぽい人は小さく会釈した後 白衣さんの前まで歩いて来ると 俺の顔を見て

「……チッ」

舌打ちをしてきた……

死ねば良かったと？ 理不尽過ぐる

「え え」と……何ですか？」

理不尽な対応に納得は出来ないが 何も言えない びびりだからね

結局は相手を刺激しないよう 下手に出してしまうヘタレ具合 びびりだしね

果たして 俺が誰かに強気で挑める日は来るのか……

「…本来なら博士から伝えられる筈でしたが　今回は私から伝えましょう…」

白衣さんのアワアワの理由かな？

割かし重要そうな雰囲気ですね

「…あなたの元の体に関係する重要な話です…」

そいつぁかなり重要でいやがりますね！？

・・・えっ何？　何か深刻なカンジっすね

ロクでもない気配がパねえんですが

「……あなたの体は」

あ　ちよつと待って下さい

心の準備がまだ

「現状　すぐ元に戻るのは不可能となります……」

「…それはどういう？」

どう聞いてもよろしくない方向に流れていく秘書っぽい人の話に
思わず口を挟むが

それを無視して

秘書っぽい人が冷静に言葉を繋げていく

「既にあなたの体は処分済みですから」

パねえ ロクデモネエ・・・

6『馬鹿は馬鹿なりに一生懸命馬鹿な人生歩んでるんです！ 馬鹿にしないで！』

お帰りなさいませ！

読んでくださってありがとうございます

やっと白衣さんと秘書つばい人の名前を出せました 良かったです

梨理華・リル・メリー・リルリ・リリアーヌ・カリスさんと

冷李さんです

あんまり 本編で出る機会無いかと思いますが

一応補足しておきます

作中 白衣さんの事を名前で呼べなかった主人公ですが 理由は
二つ

長くて覚えられなかったのもありますが もうひとつ 主人公が
びびりのヘタレだからです

名前で呼んで嫌な顔されるのを無意識の内に恐れたんです

秘書つばい人には既に嫌な顔されてますが・・・

長々と書いてしまいました すみません

それでは まったりペースの更新ではありませんが

しっかり続けていくつもりなので 応援とかよろしく

更新何時になるかわかりませんが 次回にお会いしましょう

では

7『・・・まだ物語は始まってさえ無い 信じられるか？ これ7話目なんだぞ

7話目です

すみません だいぶ遅れました

いろいろと理由はありますが

もはや言い訳はいたしません

開き直ります

後少しで現実の苦行から解放されますので 待ってて下さい

それでは第7話です お粗末な出来ですが・・・

スナック感覚でどうぞ

7『・・・まだ物語は始まってさえ無い 信じられるか？ これ7話目なんだぞ

秘書っぽい人によって明かされた衝撃の（ロクデモネエ）事実

俺の希望を一瞬で八つ裂きバラバラ木っ端微塵にしても飽きたらず 勢い余って俺の中のナニかをブチッと切った

・・・そのナニかつてのは堪忍袋の緒なわけで・・・

「なんつつつじゃ そりゃー！！？」

つまりぶちギレたわけで・・・

「何かいろいろ話が違います！？ ってか処分済み！？ あんたらヒトの体に何しちゃってんの！？？」

びびりな俺も怒る時は怒るんです

普段は静かな火山が時には自然災害として猛威をふるうように内に秘められた静かなる怒りを解き放つのだ

「本日 午後4時に焼却炉にて焼却処分を終え……」

・・・自分でもちよつと上手い事言ったかな とか思いつつ 火山噴火を彷彿とさせるような怒りのポーズを試みるが

全く動じずに報告を始める秘書っぽい人

人の体を燃やすという 自分に100%の非がある状況でこの冷静さ

もはやこの人の中で俺は『ヒト』でさえないのかもしれない

悲しい

「ちがうよ!? 処分の方法は聞いてないよ!? 確かに何しちやってんのは言っただけ!!! っていうか何!? 俺の体燃やしたの!? ホント何してんですかあんたらは!?!」

「……チツ」

「今舌打ちが聞こえた!? おかしいなあ! ぜんっぜん反省の色が見えねえなあんだ!?!」

俺の体を燃やしておきながら 全く悪びれない態度の秘書っぽい人……いや この際悪魔と呼ぼう もはや俺にはこの人が悪魔にしか見えん

因みにその頃 白衣さんは

「おつ 落ち着きたまえ! 二人とも 大丈夫だから!! まず話を聞きたまえ!!」

絶賛火山噴火中の俺を落ち着かせようと頑張っているようだ

そのあまりに必死な姿は俺の気分を和ませ思わず“いいよいよいよ
気にしないで”と言ってしまいそうになる 実際いつもの俺なら
既に赦してしまっているだろう

「だが断る！！ 何故なら白衣さん 君は俺に“体は元に戻る”
という嘘をついていたのだから！」

「だから話を聞きたまえと！」

俺はもう誰も信じない 永遠に人間不信だ

「だから話を…」

人間不信に陥った俺は彼女達から離れ 部屋の隅っこで膝を抱え
始める

白衣さんが何か言ってるが知らん 俺はもう誰も信じないのだ

誰も信じない 誰も信じない 誰も信じない 誰も信じない 信
じない 信じない 信じない 信じない 信じない 信じない 信
じな・・・

「聞いてよ！！！」

ドッ！

「ぐぼおへう!？」

信じないスパイラルに陥っていた俺に

どこから出したか分からない　めちゃくちや重そうな鈍器を叩き
込む白衣さん

薄々分かつてはいたが　頭だけはほとんど生身らしい

「ぶるすだつひゃー!!!？」

もはや言葉でさえない悲鳴?　のようなものを上げる俺

クリティカルヒット!

「ああ!？　やり過ぎた!!！」

「博士　さすがです」

部屋中をのたうち回る俺を見て駆け寄る白衣さん

白衣さん　確かにやり過ぎです　それと頭に触ろうとしないで下
さい　痛いんで

・・・秘書っぽい人　もとい悪魔に関しては手術台の逆光のせい

で表情などほとんど分らないが 恐らくはほくそ笑んでるのだろ
う そんな気がする

「~~~~~!」

壮絶な痛みに頭を抱えながら白衣さんに無言の抗議 これ頭割れ
てんじゃねえかな

「話を聞かないから……」

白衣さんちの教育方針では 話を聞かないと鈍器で殴られるらしい
近隣の中学校にでも導入すれば話を聞かない生徒は激減すること
間違いない

実質的な生徒の数も減ること間違いないが・・・

「じゃあ 説明をはじめよ!」

・・・場の空気がある程度治まった頃に　白衣さんの声が上がる
ちなみにクリティカルヒットの痛みは未だに治まらない

「……………何の？」

黙っているとまたクリティカルヒットが来そうなんで聞き返してみる
すると

「勿論　貴方の肉体を取り戻す方法についてです」

まるで当然のことを言うように応える悪魔

だけど　その内容は俺にとっての新たな希望だった

「方法あんの！？」

当然食いつく俺

「あるのだよ！」

それに元氣良く応える白衣さん

「えっ　でも不可能みたいなこと言ってなかったっけ？　…………だ
いたい焼却処分したってさっき……………」

「“すぐに元の体に戻すのは不可能”という意味です 完全に肉体を処分してしまった以上 新しく造るにはそれなりの予算と時間が必要ですから」

「新しく……造る？」

「……説明しても理解出来ると思えませんが……」

「……」

失敬な……

どうもこの悪魔はいちいち俺を馬鹿にしないと気がすまないみたいだ

俺だって大学くらい出てんだからな

……まあ 難しい話はちょっとだけ苦手だけど

ほんのちよつとね……

「私が説明しよう！……」

・・・はい

という訳でね 白衣さんに説明されましたよ

頭の弱い生徒（俺）のためのサルでもわかる優しい説明だったんで その生徒（俺）にも何とか理解することが出来ましたよ

・・・いや まあ なんかね 取り乱したりした自分が恥ずかしくなりましたね

はい・・・

でも さすがにね 誰だって体をウエルダン通り越して消し炭にされたら しょうがない反応だとは思いますが

人間としては

今は 改造人間ですが

では白衣さんから受けた説明を説明いたしましょう

最初 白衣さんはヒトゲノムがどうか もはや日本語かどうかさえ分からない言葉を使っていたが

とりあえず 簡単に言えば

新しい身体を造ることは案外簡単らしいです ええ

なんか 髪の毛一本の細胞からでも染色体を取り出して特殊な薬

品に浸けて培養すると ATP だか PTA だかっていう染色体のコピーがどうのこうの 俺のクローンがどうたらこうたらとか言うだけ

良くわかんね

まあ 何とかなるってことはわかった

ただ 今はその為の資金が無いんだとか

どうすんねーん

とか言ったら殺される気がしたんで黙ってた

「資金が無くなったのはあなたを改造したせいですから 勿論協力してくださいますよね」

というのは悪魔・・・もとい秘書っぽい人の弁だ

・・・いろいろ言いたい事はある

勝手にあんたらがやったんじゃない？ とか

恐いから言わないけど

「はあ……メタルボディ分かりましたよ それで？ 俺に何させる気ですか？ 多分この体じゃ 面接の段階で落とされますよ？ ろくにコンビニのバイトも出来ないと思いますぜ？ それともヒーローショーのバイトですか？ マスクさえ着ければ衣装要らないし あれ 天

職じゃね？」

「ふっ…… 考え方がセコいな これだから凡人は…… だが発想は悪くないぞ その体を持ってすれば作り物のヒーローシヨード目じゃない 本物のヒーローになることだって出来るのだよ」

・・・あゝ うん そうなんだゝ

また白衣さんの悪い病気だろう こういう時は流すに限るな

・・・誰もが通る道とは言え 厨二もここまで悪化すると大変だ 将来イタイ大人になりかねない …… 厨二とはかくも恐ろしいものののだ

何故にそこまで詳しいのかって？ 何を隠そう 俺もつい最近厨二から足を洗うことが出来たのだ

いやお恥ずかしい

だが最早 俺が厨二などという素面なら赤面もの 穴があったら入りたくなるような言動をとる事はあるにえない

「それで実際のところ その“お仕事”とやらは何なんですか？」

白衣さんがha! ha! ha! とアメリカンな高笑いをしてる内に話を進める事にする

「はい……貴方に手伝って頂く仕事は 簡単に言ってしまうえば世界平和の為の活動です……」 「世界平和？」

秘書っぽい人の漠然とした説明に思わず聞き返すが……

なぜだろう…… 世界平和ほど平和的な響きのある言葉は無いはずなのに とてつもなく嫌な予感がするのは

なぜだろう……

この人の言動から 一タロクでもない気配（俺にとって）が漂うのは……

「世界平和という崇高な使命を持った 我々自身の手によって世界を統治する……」

その答えは秘書っぽい人の次の言葉ではつきりすることになった。
・
・

「所謂 世界征服です」

・・・・
はー
うん
ん？

7『・・・まだ物語は始まってさえ無い 信じられるか？ これ7話目なんだぞ
お帰りなさいませ〜

今回はご覧のようにキャラ崩壊が激しい回となっております 物
語を強引にでも進めていこうとした結果です

何かもうホントすんません

これからも精進しますので お心の広い方々はまた見てやって下
さい

それでは 次回の投稿が何時になるかわかりませんが また会い
ましょう

ではでは

8 『シリアスモードにゲッソリ』（前書き）

8話目です

すみません とても遅れました

そのわりに内容に自信は・・・

とにかく見てやって下さい！！

それでは8話目です どうぞ！

8 『シリアスモードにゲッソリ』

「世界征服です」

・
・
・

「…はえ？」

どうも 俺です

すみません へんな声が出ました

でも それは仕方ない事だと思います

だって 秘書っぽい人の言葉は予想の斜め上から消える魔球を投げ込んだのに 完璧なタイミングで打ち返されたくらい 逆に予想外だったのだから・・・

だって世界征服だぜ？ 世界征服

そんな 変な声くらい出るだろ？

『はえ？』や『ふえ？』の1つや2つくらい出るさ

世界征服なんだもの・・・

みつお

・・・まあ とにかくだ秘書っぽい人の言った言葉は俺には全く理解できなかった というより冗談にしか思えなかった

だから俺は呆けたように何のアクションもとれなかった

しかし そこは秘書っぽい人 そんな俺の様子を見ても 構わず話を続ける

「我々は 最終目標に世界平和を掲げています しかし その為には皆の中心に立ち 世界をリードする正しき指導者の存在は不可欠です」

一呼吸置いて 更に続ける

「我々が目指すのは その指導者というポジションに立ち 世界から戦争などという大きな悲しみを無くす事です」

まるで新手の宗教のような言い回しだが 印象としてはテロリストに近い

さらに秘書っぽい人は 世界征服の必要性やらなんやら 何かと物騒きわまりない話を延々と熱く語り始める

曰く

『……良いですか？ 世界には我々以外にも世界征服をもくろむ不埒者がいて……』

・・・

『……世界には未だに多くの問題が残っています それは何故か？ 国のトップ……つまり 政府が腐りきっているからです！ だからこそ指導者として我々が……』

・・・

『……今！ 世界は求めているのです……！ 正しき指導者を！ 誇り有る革命者を！ 強き英雄を！ ならば今こそ我々が立つべきなのです！！ 我々の戦う意味は……』

・・・

・・・終わらない

秘書っぽい人が熱い語りを始めてから　そこそこ時間が経ってる
気もするが　いい加減長いです

高校時代の朝礼で校長からの無駄に長い演説を聞かされてる気分だ
興味ない話ほど長く感じるんだよね

とまあ　秘書っぽい人の話を右から左に聞き流しながらいろいろ
と考えてみる

世界征服には　秘書っぽい人が熱くなる何かがあるらしい

仕方がないので秘書っぽい人の隣で暇そうにしてる白衣さんに簡
潔な説明を求める

「つまり　我々の目的の為に世界征服をするから協力したまえ
という事だよ」

まあ 簡潔だけでも

そんなこと出来る訳無いでしょうよ

実現不可能に決まってるじゃまいか まったく

「ここのテクノロジーを使えば簡単だと思わないかい？」

「……てくのろじー？」

「科学技術の事だよ？」

「ああ なるほど… って いやバカっ そのくらい分かってるから 科学技術でしょ？ 科学技術 あれでしょ？ テクが科学で
ノロジーが技術っていうあれっばいやつだね？ 最初から分か
ってたよ ははは……」

「…そこから分かってなかったんだ？」

白衣さんにため息をつかれた

「あゝもう！ そうじゃなくて そのご自慢のテク…テク…テク
ニシヤン？ 「テクノロジーの事？」 そうそれ！ それはいつたい
どの程度なのかってところを聞きたいだけだからっ」

これ以上 頭のレベルが露呈しないように話を変える 手遅れな
気もするけど

「……」

無言で指差す白衣さん その先には ……俺？

「……サッ」

自分の背後を振り返ってみる しかし それっぽい物はないよう
に見える

ということは……

「まさか！ ……ステルス迷彩だとしても「違うよ」……えっ」
……違うようだ

「何でちょっと残念そうなのか分からないけど 私が指さしてる
のは“それ”だよ」

白衣さんの視線と指の先には やっぱり……

「つて 俺やないかい」

某髭男爵のノリ まだたまに見るよね

「白衣さん？ 俺にはそのエクスタシー「テクノロジー」それなんて無い……」

途中まで言っただけ

「俺 今ロクデナシー「テクノロジー」の塊じゃん」

ロクでもねえ

完全に忘れてたわ

「そう その体は私達が持つテクノロジーのすいを結集した最高傑作なのだよ！！ その性能の高さは君が一番分かっているはずだよ！」

白衣さんのテンションが上がり始めた

手をグーパーしてみる

・・・確かに全くと言っていいほど違和感が無い それどころか触った感覚や温度まで感じるし 世間一般に知られてるようなスパイシー「テクノロジー」とは性能が違うようだ

「テクノロジーって言い過ぎてゲシュタルト崩壊し出したよ」

っていうか今心の声を読まれた気が「気のせいだよ」　そうか
気のせいかな

「……そのエクトプラズマー」テクノロジーだよ！　原形の面影
がないよ！？　まさか　わざと！？」それが凄いつてのは分かった」
そろそろ話を進めよう

「絶対わざとだよね！？」

白衣さんが何やら叫んでいる　何かあったのだろうか

「でもさ　それだけで世界征服なんて出来ない？　もっとこ
う　政治的なものとかあるわけじゃん？」

我ながらナイスな質問をしたと思う

「……テクノロジーもまともに憶えられない君の口から政治的な
んて言葉が出るなんて驚きだよ　……やっぱり　わざとだったのか
な……」

「わざと？ えっ なにが？」

あれ？ 何か怒ってる？

「……はあ もういいよ 君の疑問に答えておこう しかしその為には確認をとっておく必要があるのだよ」

「えっ？ 何？」

さっきまでの白衣さんと雰囲気ガラッと変わった なんて言うか シリアスムードみたいなの？

「……先にそんな体においてこんなことを言うのもおかしい話なんだけど」

「え〜と 何したの？ いきなり改まって」

「……君は 私達の仲間になりたい……？」

突然 白衣さんの口調が暗い影をおびたような印象を与えるものにかわる

表情は無いがどこことなく辛そうだ

「……これから先の話は私達の組織にとって正に肝とも言つべき

ものののだよ…… 今までの話もそうだが あまり部外者に話して
良いものでも無いんだよ」

つまり こっから先は仲間にしかな話せないって事か

っていつか 何をそんなにシリアスっぽい感じになってるんだろ
う？

白衣さんは 今までのイメージが崩れるくらい真面目に喋ってる
キャラ作りしていた時の白衣さんとも 素の白衣さんとも違う

「私がこれから君に求める答えがとても卑怯だという事は分かっ
てるよ 選択肢なんて無いってことも だけど 選んで欲しい 後
悔をしないように……」

強い責任感をその目に宿した白衣さんが其処には居た

「……」

なんだろう 辛そうだ

「私達の仲間になれば いつかは体を取り戻すことも出来るだろ
う…… しかし 断るというのなら その体は返してもらおう ……
つまり 心苦しいが君には死んでもらうことになるのだよ」

だが断る

ああ いやごめん嘘 ふざける気は無かった

どうも俺は シリアスっぽい場面が極端に嫌いだからつい・・・

「白衣さん ごめん 話が唐突過ぎてついていけなかったりします」

「……私達は 言うなれば“悪の秘密結社”だよ ……聞こえの良い理想なんて掲げてるけど 結局は今の平和を乱す“ただの悪者”に過ぎない……」

白衣さんが異様に低いトーンで話し出した

「冷李君の言葉を借りるなら 研究に都合が良かったから拾っただけの君は 正直…… もう用済みなんだ」

さらに 白衣さんは続ける

「……だから最後に 仲間として世界征服に手を貸すか ……ここで死ぬかを選んで欲しい……」

白衣さん 最後は言い切る前に俯いてしまった

「あゝ とりあえず 俺がその問いに答える前に 一つ質問に答

えて欲しいんだ」

「……なにかな？」

相変わらず暗い声の白衣さん 俯いたまま反応する

何か恐いんだけど

「ひゃくいしゃん… 白衣さんは何で俺を助けたの？」

白衣さんの暗い雰囲気には圧されて若干噤んでしまった

「……」

無言の白衣さん

「さつき秘書っぽい人が 『資金が無くなった』 って言ってたの
思い出したんだ…… そんなに余裕の無い状態だったのに 俺みた
いなただの人間を助けたのはどういう事なのか気になっちゃってさ」

白衣さんの反応を伺う様に話しかける

「……どうしても必要な研究があつて「資金を全部使つてまで？」
……っ」

台詞の途中で割り込む 白衣さんが嘘を言つてると思ったからだ

「多分だけど 必要な研究つてのは嘘だよね？だって こんなに
凄い物が作れるなら侵略兵器なんて完全なロボットを造った方が良
いはずだもん 例えば ガ○ダムみたいなね？ なのに人間としての
自我を持った改造人間なんて造る必要が無い」

白衣さんの表情が泣き出しそうに少しずつ歪んでいく

……いや イジメてるわけではけして……

でも 必要以上に悪ぶってる白衣さんの態度が気になる

「っ……そんなの気まぐれだよ！ そんなことより！ 私の質問
に答えてよ！？」

声を張り上げる白衣さん 顔は下を向いたままだ

「仲間になるか！ 死ぬか！早く選んで！」

白衣さんの フー フー という肩で息をする音がやたら大きく
聞こえる

「俺は」

答えは既に決まってる

「仲間になるよ」

これしかない

「本当に良いんですか？」

いつの間にか演説を終わらせていた秘書っぽい人が聞いてくる

「当たり前ですよ……白衣さんは俺を助けただけなんだから」

今 俺の（都合の良い）頭の中にはこんなストーリーが（都合良く）広がっている

ある日 世界平和という大望をもって世界征服を目論む白衣さんの前に 事故にあつて瀕死の俺が現れた

傷は深く現代の医療技術ではとても治せない

正義感の強い白衣さんは瀕死の俺を助ける為に 秘書っぽい人とコツコツと貯めていた侵略資金を全てつぎ込んでしまった

必死の処置のおかげで俺はどうにかこうにか生きる希望を得るものの 改造人間という微妙な宿命を背負ってしまうことになったわけだ

「そして 白衣さんはいろんな責任を感じた結果 俺にせめても 選択の自由をくれたんでしょ？」

全部都合の良い俺の頭が作り出した妄想 でもその妄想は全部が全部間違ってる訳では無いだろう

なぜかそんな不思議な確信がある

「っ……そんなこと ない」

それでも否定する白衣さん

自分のやった事が自己満足でしかないからこそ それが分かって いるからこそ 白衣さんは 責任を感じて “悪役” を演じた “能 気なマッドサイエンティスト” を演じた

そういう事だろう

「だって わ たしは き 君を……」

しゃくり上げる声のせいで 下向いてても白衣さんが泣いてるのが分かる

「ありがとう白衣さん もう強がる必要は無いよ？ 俺を助けてくれたんだから 白衣さんに責任は無いよ」

中腰になつて白衣さんと目線を合わせる 白衣さんがゆっくりと顔を上げ その顔が見えるようになる

やっぱり泣いてた

「白衣さんに悪役は向いてないよ 優しいもん 白衣さんは」

そっいいながら 白衣さんの肩に力はいれないようにそっと手を添えて 笑いかける

女の子の涙は苦手なのだ 早く泣き止んで欲しいという願いを込めての笑顔だったのだが

「うう……えぐっ……ふうえええええん!!」

予想に反してマジ泣きし出す白衣さん

緊張の糸が切れたとでも言うように 余計に大泣きを始めてしまった

「……これは 予想外」

何とか泣き止んでもらおうと試みるものの効果無し

オロオロする俺

「秘書っぽい人 ヘルプ!!」

「……誰が秘書っぽい人ですか」

秘書っぽい人に助けを求めるが 助ける気がない

クソッ 孤立無援か！

「あわわわっ…… 頼むから泣き止んでくれよ」 白衣さん
泣く

超オロオロする俺であつた・・・

「グスッ……ヒック……」

やっと白衣さんが泣き止み始めた(?)頃

「お… 落ち着いたでゲソか… 白衣さん」

今の俺に言葉を当てはめるならゲッソリがぴったりでゲソ

変顔 物真似 だじゃれ 一発芸 エロ詩吟 自虐 物ボケ e t
c
…

白衣さんを泣き止ませる手段を粗方試したでゲソ

語尾がおかしくなるくらいには頑張ったでゲソ…

…すみません 戻します

この体に体力という概念があるのか知らんが 少なくとも精神的
なナニかがすり減った気はする…

とてつもなく疲れた…

「……うん もう大丈夫だよ ブズッ」

鼻水を吸い込みながらこちらを窺う白衣さん 涙で赤くなった目
が痛々しい

「そう……良かった……本当に良かったでゲッソリ……」

ああ 進化してしまった・・・

8 『シリアスモードにゲッソリ』（後書き）

お帰りなさい

今回はいろいろ試行錯誤していたら何故か長くなってしまいました
たが・・・

どうでした？

話を進める為に頑張ったらかんなカンジになってしまいました

コメディよりシリアスの方が書きやすい気がする

感想とかいただけると嬉しいのですが

あと 誤字脱字の報告もして下さると助かります

まったりのんびり投稿ですがしっかり続けるつもりです！！

次回に会いましょう！

ではでは！！

9 『新キャラの口調に聞き覚えが有るのか？ そうか……』 (前書き)

9 話目です

いやー 何だか前回の投稿から時間空いちゃいましたね

無駄に男らしく 言い訳とかはいたしません！

これから精進していきます！

因みに今回新キャラとか出してますが まだいろいろ未定です

んじゃまあ そんな訳で

9 話目です どうぞ！

9 『新キャラの口調に聞き覚えが有るのか？ そうか……』

どもども皆様最近めつきり寒くなってきましたねえ
雪でも降るんじゃないかねえかって中いかがお過ごしでしょうか

皆様の心のサンドバッグ俺です

あつ冗談ですからマジで殴りに来ないでくださいね

今の俺メタルボディなんであまり殴ったりすんのはお勧めできません

あれ？ 誰と話してんだ俺……

そんなカンジに目の前の事象から目を背ける為 軽い現実逃避的な思考をしている俺

最近現実から逃げたくなることが多い気がします

とりあえず現在俺の目の前で起きている事象に関しては後々触れていこうと思います

という訳で 今いるところは

「オペレーションルームだよ！」
らしいです

さっきまでの部屋に比べれば 三倍くらい広い部屋に白衣さんの
声が軽く反響する

部屋を見回し どこかで見たことあるな 〴〵 という感想を言う前に

とりあえずなぜここにいるのかという話をしておこうと思う

といつても簡単な話で 先程までの手術台的なもののある部屋で
は仲間になった俺に改めて詳しい話をするのに問題があるとのこと
で話しやすい部屋があるからちょっと面かせやコラみたいなカンジ
である

実に簡単

そして現在白衣さん曰くのオペレーションルームなる広い部屋に
案内されたわけだ

まあ 案内されたというか手術台の部屋の唯一の扉を開けたらこ
こだったというか
ぱつと見宇宙世紀でジオンから木馬と呼ばれた白ベースの中みた
いな所である

この部屋の設計者は例のロボットアニメの視聴者だったのだろう
か？

本来ブラ〇トさんが座る位置にイスが無かったり窓の代わりに巨大なスクリーンが前面にあったりと所々違いがあるようだが・・・

いやまあ・・・そんなことはどうだって良いのだ

冒頭で俺が現実逃避をしてた理由

俺にとって今一番の問題は目の前にあるのだから・・・

「白衣さん白衣さん　メタルボディの調子がすこぶる悪いみたいだ　見えちゃいけないものが見えるんだけど……」

正面に見えるそれを凝視しながら不調を訴える

「？　その体は脳に直接的にも間接的にも干渉なんてしないはずだよ？」

「いや　故障だよこれは絶対故障俺には分かる」

「いやいや　だから故障じゃないって」

「いやいやいや絶対っつ対故障だね！　……人が半透明で浮いてるんだよ！？　絶対ありえないもの！　そんな絶対ヤバイヤツだもの！　絶対見えちゃいけないものだもの！！」

俺の視線を一身に受けるもの

肩にかかる程度の青い髪 パツチリと大きな目に青い瞳 スレン
ダーな体には女性的な凹凸はあまり無いものの 透き通るような・
・っていうか透きとおってる白い肌

そう・・・ それはまさしく女の幽れ

『ジャツジ 申告します 貴方の体を診断した結果 ^{スキャン}故障と見受
けられる問題は存在しませんでした』

・・・えっ？ 喋った？

そんな馬鹿な・・・ 喋る幽霊なんているのか！？

目の前の現実には驚愕していて反応の無い俺に続けて口を開く女の
幽霊

『ジャツジ 訂正します 貴方の言う“見えちゃいけないもの”
が私を指しているのなら それは体の不備^{ボデー}が原因ではありません
よって 故障しているのは頭の方であると推測されます』

「え？ ああ うん……なるほど いや 待って あれ？」

目の前に半透明の幽霊？ がいるうえに 突然喋り出すという事
態に酷くパニクる俺（何だかバカにされた気もする）

「……ぷしゅ〜（訳が分からずショートした）」

『ジャッジ 質問します 彼が例の“改造人間1号”なのですか
ドクター 梨理華？』

「うん そうだよ」

リアルに頭から煙を出して思考停止状態の俺

そんな俺を放って話が進む

『ジャッジ 続けて質問です 何故彼は頭から煙を出しているの
でしょうか？ やはり頭の故障が酷いのでしょうか？』

堂々と馬鹿にされた 幽霊に

「問題無いから気にしなくて良いよ それに後でしっかり紹介するし」

『ジャッジ 了解です』

青髪青目の幽霊は軽く会釈した後

『ジャッジ 報告します 先程外部モニターとのリンクが可能になりました』

と白衣さんに告げた

「ちょうどいいモニター開いてくれるかな？ 彼にいろいろと教えなきゃいけないんだよ」

『ジャツジ 続けて了解です』

俺の頭は未だに煙を吹き続けていて軽くばや騒ぎだが

とりあえず白衣さん達はこの幽霊？ を問題視してはいないようだ

つまりこの幽霊に害は無いのだろうか？

いや騙されるな 幽霊とはこの世に未練を残したが故に具現化したもの・・・長い間現世にいる幽霊は悪霊と化してしまうはず（愛読書ブーチより） つまり結果的にはこの世に良い幽霊などないはずだ いや そもそも幽霊なんて非科学的な物は存在しないんじゃないか？ そうだ間違いない 幽霊なんてこの世に存在しない・・・あれ？ でもこの世に存在しないんならあの世には居るのか？ っていうかあの世なんて有るのか？ いや 待て待て待て おかしいぞ どうしてこうなった？ 元々何の話だったわけ？ あっ 幽霊がどうのって話だったわけ？ つまり白衣さん達が問題無く接しているということは いやいや そこで騙され……（以下ループ

結論 白衣さんと女の幽霊は友達っぽい

俺は白衣さんと友達であるからして

友達の友達はやっぱり友達って事で

「っという訳で幽霊さん これからよろしくー!!」

害の無い幽霊は怖くない 害の無い幽霊は良い幽霊 良い笑顔（若干青いが）で右手を差し出す（ガクブルだが）俺

敬意（畏怖）を込めて さん付けをする

対する幽霊さんは 気持ち怪訝な顔で

『ジャッジ 訂正します 私は“幽霊さん”ではありませんが』
と言ったのだった

人種？ やら種族？ やらを超えた友達？ が出来た瞬間である

9『新キャラの口調に聞き覚えが有るのか？　そうか……』（後書き）

お帰りなさいませ

新キャラ出しました　これまた扱いにくそうな

前の3人でさえ言うこと聴かねーのに

新キャラ増やす前にストーリー進めろって

すいません　独り言です

やっぱりあれですかね？　キャラにはモデルとかいた方が良かったりしますかね？

そついうの全く考えないで書き始めちゃったから　見切り発車感がパねえです

そんなこんなでグダグダと進んでいきます！

次の投稿が何時になるのか全く予想出来ませんが

次回にお会いしましょう

ではない!!

10『改造人間の俺に人権ってありますか?』（前書き）

10話目です。

最近、本当に寒いですねえ。

太陽にはもう少し頑張ってもらいたいところです。

まあ、季節によっては有給休暇でもとって、ゆっくりして欲しくなる時もありますけど。

こう寒いと指がかじかんで執筆がやりにくいですね。

嘘です。すいません。

前に投稿してからちょっと日をあげすぎました。

でもまあ、のんびり生きましょーうよ。急ぐと転んだり事故ったりラブコメったりしてしまいますよ。

そんなこんなで10話目です。どうぞ見ていって下さい。

10『改造人間の俺に人権ってありますか?』

『ジャッジ 操作を始めます』

そう言つと幽霊さんはモニターの方を向いて直立したまま黙りこんでしまった。

部屋が薄暗くなつていく。内心ビクビクしながらどうしたのかと思つていたら 『ブウン』という低い音がモニターの方から響いた。

「ぬおっ!?!」

同時に明るい光がモニター方向から部屋を照らす。

見てみるとさっきまで真っ暗だったモニターの画面が、なにやら英文を写し出しているではないか。まぶしっ。あの、もうちょい光抑えてくれない? ああ、どうも。

「おお……」

思わず感嘆の声がもれてしまった。

何かよく分からないが映画館級の大画面モニターが動き始めた事に単純な感動を覚えてしまったのだ。

「じゃあ頼むのだよ」

白衣さんが幽霊さんに何かを指示する。

『ジャッジ 了解しました』

白衣さんと幽霊さんが短いやり取りをすると、もう一度『ブウン』という音が室内に響いた。

さっきまでモニターに映し出されていた解読不能の英文が消え、次に表示されたのは

「……うげっ」

日本地図だ。

学校に通った記憶のある方なら誰しも一度は見た事のある日本地図。当然俺だつて見た事はある。

小学・中学・高校と、苦しめられ続けた強敵だった。

そもそも興味のケケラも無い俺に都道府県を覚えるなんて無理に決まっている。

テストではレッドポイントとか普通だったな。今でも見ると吐き気がする。はっきり言おうと思う、日本と言わず地図と名のつくものは大っ嫌いです。

「そうなのだよ 君にはまずこれを 見て欲しいんだよ」

そうとは知らず、白衣さんがパチンと指を鳴らして幽霊さんに指示を出す。

『ジャッジ』

それを受けた幽霊さんが返事をする。またモニターの画面を見たまま直立不動になる幽霊さん。

モニターに映し出された日本地図にポチポチと赤い点が表示され始める。うつぷ。日本地図を視界に入れると吐き気がする。気をまぎらわせなければ。何かないか……何か。

あれ？ そういえばいまさうだけど幽霊さん、リモコンとか使って無いみたいだけどどうやってモニターの操作してんの？

「これが何か分かるかな？」

リモコン無くても幽霊ならこのくらい簡単なのだろうか？ ポルターガイスト？ 流石幽霊だぜっ と、幽霊さんについてのたわいもない疑問に意識をまぎらわせつつ、日本地図に全体的に散りばめられた赤い点を見してみる。

「うつぷ……何って ゲホッ 言われてもなあ ガハッ…ゼエゼエ…！」

鼻先にニンニクと十字架を突きつけられた吸血鬼並みに瀕死な状態で応答する。

ざっと数えただけで2 30個以上はある赤い点。
それが数えるのが面倒なくらい日本中に散らばっている。

しばし黙考。

「これはまさか！ 伝説の古代文明“アトランティス”の造り出した「違います」えー」

全部言いきらない内に割り込まれてしまった。犯人は秘書っぽい人だ。いきなりどうしましたか？ 今まで空気だったから寂しかったんですか？

ガシッ（アイアンクローの音）

「貴方は馬鹿ですか？ いや馬鹿ですね」「えっ　ちよつ何で暴力反対いだだだだだだっ」黙ってる馬鹿」

この人の暴力は照れ隠しのアレですか？　まさかのツンデレ？
萌えるわ（笑）

メキメキッ！！（指が食い込む音）

「あれ何だこの力！？　あ痛だだだだだだっ！　まるで万力のように俺の頭蓋が砕かれて痛でででででっ！」

今回で確信が持てた。秘書っぽい人は俺の心を読んでいるに違いない。人権侵害の域を越えている。

アイアンクローをかけられて頭をメキメキ言わせている（現在進行形）俺を、白衣さんは「ふう　やれやれだぜっ」みたいな顔とジエスチャーで見ていた。そんな白衣さんにヘルプの視線を送る。

しかし、何を勘違いしたのか、

「仕方がないなあ！　まったく　分からないみたいだから私が教えてあげるのだよ！　よく聞きたまえよ！」

変に高いテンションで説明し出した。あつ、やばい。視界がぼやけてきた・・・

「ふっふっふっふっ　まずこの世界に世界征服を狙う組織が我々以外にも複数存在していると話したのを憶えているかい？　その数は君が考えているよりも多いんだよ」

そういえば頭の良い人は他人の知らないような事を教えたりするのが好きだって、たしかじいちゃん言ってたなあ。あと他人の話を

聴かないとも言ってた。ああ、じいちゃんが呼んでる気がする。

「の中でも日本には特に集中しているのだよ！　つまり　聞
いてる？」　もうムリ、やばい、死ぬ、助けて。最後の力を振り絞
って右手を延ばす俺。

「……つまり！　日本全体にあるこの赤い点は地球侵略を狙う我々
以外の組織」　状況を見て一瞬考えた後、見なかった事にしたら
しい。ゴギャツ（秘書っぽい人の手が何かを砕いた音）

「いわゆる　敵なのだよ」

ビーツ！！　ビーツ！！

白衣さんが言い終わるとほぼ同時にけたたましい電子音が鳴り響
く。モニターには『WARNING！！』の文字がでかでかと出
ている。

「これはアラート！？　どうしました！？」

突然鳴り響いたアラートの原因を幽霊さんに尋ねる少し焦った力
ンジの秘書っぽい人、アイアンクローは継続中。ぶらーん（今の俺
の状態）

『ジャッジ　報告します　警戒していた例の敵対組織にこれまでに
無い明確な動きがありました　現在は航空機で編隊を組みつつ移動
中　東京に向けて移動中　恐らく都市攻撃級の侵略作戦を仕掛ける

つものようです』

幽霊さんが相変わらずの調子で淡々と答える。

『ジャッジ 映像出ます』

モニターが切り替わり日本地図の代わりにヘリコプターを映し出す。ヘリコプターと言っても頭に『軍 用』の文字が着くような馬鹿デカイヤツだ。映画とかで見たような黒光りする銃も見える。

「遂に動き出しましたね “独立変革大隊”」

秘書っぽい人の咳きか聞こえると同時、大型ヘリの横つ腹に書かれている“独十変十隊”という文字がモニターに写された。

アイアンクローが解かれ、自由になったものの、1日に頭へ受けるダメージの量が既に限界を越えているため膝がガックガクの俺。

『ジャッジ “独立変革大隊” 略称“独十変十隊” 我々と同じように最近発足したばかりの新参です』

またまた感情の起伏が無い淡々とした声で喋り出す幽霊さん。誰に話しているのだろうか？ 白衣さん達は知ってるっぽい顔してるし（多分）。あれっ！？ これはもしかして もしかすると もしかしたりして俺の為に説明してくださっていらっしやいますののでしょうか！？

やべえよ、この人（幽霊）すげー良い人（幽霊）だよっ！ 気遣いが出来るとても良い人（幽霊）だよ！

と、多少回復した俺は久しぶりに人間らしい気遣いをされた事に涙を流さんばかりの感動を覚えていた。

『 半年前に“過激派”を名乗った組織で その目的は我々同様“世界征服”を掲げています しかし 恐らく根の目的は全く異なるものであるというのがDr・梨理華の考えです』

「痛ててっ “根の目的”って つまり白衣さんの言ってた世界平和ってヤツのこと？」

『ジャッジ そのとおりです 我々の“世界征服”の先には“世界平和”という未来図に繋がっています つまり全世界を掌握し小さな争いさえ無くす事 それがいわゆる“我々の”根の目的です しかし彼ら 』

今まで無表情で淡々とした幽霊さんの顔が、少し嫌悪に染まった気がした。

『“独立変革大隊”が“世界征服”を目指す根の目的は「その過程から得られる“利益”そのものなのだよ」

幽霊さんの言葉を盗ったのは白衣さんだ。

「別におかしい事は無いのだよ ただでさえ数多いそれぞれの組織の目的が 同じである方がおかしい訳だし」

言いながら何かを考えている様に顎に手を当てたり指をクルクル回したりする白衣さん。不意にポンツと手を叩く音が響く。

「クツクツクツ よしっ これはちょうどいいのかもしれないのだよ！」

なんだか実に愉しげなセリフが聞こえてくるが、モニターの画面

が逆光になっていて真っ黒な影しか見えない。

「は 白衣さん いったい何がちょうどいいかもしれないんですしょうか？」

逆光で全身真っ黒な影の白衣さんは妙に迫力があって、若干びびりながら訊いてみる。

「クッハッハッハッ 勿論決まっているではないか！」

白衣さんの真っ黒な影がゆっくりと俺に向けて指をつき出す。激しく嫌な予感がする。

「ちょうどいいから君に」

あっ、今一瞬笑ってんのが見えた。

「初仕事をしてもらっただよ！」

激しく嫌な予感が当たる気がします。

10『改造人間の俺に人権ってありますか?』(後書き)

お帰りなさいませ。

こんなカンジに仕上がりました。

それじゃまた次回の投稿で会いましょう。

寒っ。

11『一般人を書いてると、どんどんキャラが濃くなっていく』(前書き)

11話目です。

新年初投稿になります。

つつても間が開きましたね。
申し訳ないです。

では11話目です。どうぞ。

11『一般人を書いていると、どんどんキャラが濃くなっていく』

その日は朝から騒がしかった。よくよく考えてみればそれは、何かの予兆だったのかもしれない。っていうかストレートに原因だったのだろう。

ああ、なんであんな事に……

とある都市

とある民間人の視点

「あゝっ まだ寝てたっ！」

日曜日の早朝、とても心地の良い眠りの国を楽しんでいた私は、現実の世界からの刺客により文字通り叩き起こされた。

「お父さん 朝だよっ！ 起きろーっ！！」

ドッ

「グハッ！？」

鳩尾あたりに感じる重みに、軽く顔をしかめながらそこを見やると

「起きろーっ！」

娘が全力で跳び跳ねていた。

ドスッ

「グフッ！ 分かったっ 分かったからっ」

「とうっ」

ズドッ

「グエッ！ 起きるからっ！ ってか もう起きたからっ！！」

私の鳩尾はトラランポリンじゃないっ

「早く顔洗って準備してっってお母さん言っただよっ 約束したんだからねっ 遊園地っ」

とてつもなく上機嫌そうな娘は、それだけ言っただけで部屋を出ていった。今年六年生になった娘ではあるが、行動から幼さが未だ抜けない。

「っふあゝあ」

欠伸が出る。

今日は日曜日の現在時間7：30。健康な高校生男子であっても余裕で眠りの中にいるだろう。

当然私もいつもだったらこの日のこの時間は、布団の中で毒リンゴを食べた白雪姫並みに堂々と情眠を貪っているはずなのだ。では何故私がこの日のこんな時間に叩き起こされなくてはならなかったのか

ヒントは先程の娘のセリフの中にある

「んゝっ 何で今日に限って晴れんだよ」

伸びをしながら空を確認してみる。空は快晴の青空だ。雲一つ無い。ちよっとした奇跡だ。

というのもこの国の季節的な物で、雨が続いていたからこの時期に晴れはごく珍しいのだ。

週末は仕事が無いということで、家でゴロゴロする予定だったのだが、娘の学校もちょうど大型連休に差し掛かっていたらしい。

娘曰く

「暇っ どっか連れてけ！」

いや、実際こんなカンジで言われましたね。敬意とかゼロです。

その後1時間ほど脅は…いや 説得が続き、娘が金属バットを素

振りし始めた所で私が折れたのだ。

娘は間違いなく母親似であろう。

そんな訳で、日曜日“もし晴れたら”という条件のもと遊園地行きを承諾したのだ。

はあ、なんで今日に限って……と、もう一度未練がましくため息をついた所で洗面台に向かうのだった。

現在9：00くらい。奇跡的に雲一つ無い快晴の下、私は家族と遊園地に来てしまっています。

「お父さん 次アレ乗りたいっ
」

娘が指差す先にあるのは

（きゃあああああ！！）

けたたましい悲鳴を追想曲のように奏でる拷問器具……もとい、この遊園地で一番人気の絶叫マシンだ。

螺旋状のコースを上がったり下がったり飛んだり跳ねたり、重力

だったり遠心力だったりをいろいろと無視したアトラクション。その名も“あっちへGO!!”。

どこへGOさせる気だ。

(うわあああああっ!!!)

「……パス」

「えっ」

「えっじゃねえよ お前さっきから絶叫系しか乗ってねえじゃねえか そろそろ限界だわ」

何を隠そう娘は極度の絶叫マシンジャンキーなのだ……

「限界？ 私はぜんぜん平気だよっ？」

「俺がだよっ」

しかも、必ず私が道連れにされる。

「絶叫系ばっかハシゴしやがって その上あんなヤバそうなのに乗るつもりか？」

(ぎゃああああっ!!!)

「見てみる大の男が恥も外聞も無く泣き喚いてんじゃねえか」

(た 助けてくれーっ!!!)

可哀相に……

「あんなもんに乗ってみろ 今に泣き叫ぶ事になるぞ……俺が」

とにかく自分が既に限界を迎えている事を必死に伝えて見る。ちなみにお母さん……もとい私の妻も絶叫系ジャンキーであり、そのレベルは娘を軽く凌駕する。あの人に付き合わされたら身心がもたない。例え娘でも。

何だかんだ言っただのひとと比べれば娘など可愛いものでしかない。所謂、圧倒的に格が違うのだ。

「ふう まあ確かにちよつと疲れたから アレに乗る前に休憩っあそこに売ってるフランクフルトでも食べようか」

少しは私の気持ちが伝わったようだ。これがあの人なら首根っこ掴まれて強制参加だっただろう。実に恐ろしい。

「でも乗る事は決定なんだな……まあ休めるのは素直に有り難いが……」

「十本くらい」

「吐くぞ 流石に……」

「大丈夫 大丈夫……っ」

フランクフルトの屋台に走って行こうとした娘が途中で立ち止ま

る。

「何だ どうした？ 大丈夫か？」

娘の様子がおかしい事に気づき近づいてみる。

「……アレ」

私の声に固まっていた娘が反応する。視線はどうやら空に固定されているらしい。

「アレ？ ……ん？」

娘の目線で視線をたどってみる。するとそこには確かに少し異様な物があった。

「ヘリ？」

それも一般的なただのヘリコプターでは無い。いつかテレビで見た事がある軍用ヘリよりも大きな機体が黒く塗装され、圧倒的な威圧感を醸し出している。

「自衛隊……じゃないな 黒いカラーリングなんて見た事無い………
…っかこつち来てね？」

黒いヘリがだんだんと近づいて、その大きさに改めて驚く。

「お お父さんっ……」

娘が私の服の端を掴む。珍しく恐がっているようだ。絶叫系のア

トラクションを笑顔でハシゴするようなヤツが、こんな可愛い反応を見せるのは本っ当に珍しい。……

「恐いの？（笑）」

「……ギチッ（怒）」

一瞬でサブミッションが完成した。

（バラバラバラバラバラ…）

そんなこんなやってる内にプロペラの音がめちゃくちゃ近づいてきた。プロペラによって発生する突風が凄まじい。正に目と鼻の先だ。へりはフランクフルト屋台の真上あたりで空中停止している。

「『独十変十隊』？」

黒いへりの側面にデカデカとペイントされた『独十変十隊』の文字。聞き覚えも見覚えもさっぱり無い。

「お父さんっ 逃げようっ」

つらつらと考えていると、娘が私の腕を引っ張ってきた。

「あ ああ そうだなっ とにかく離れようか……」

一旦考えるのを止め、とりあえず厄介な事になる前にその場を離れようとへりに背を向ける。

（グシャー！！）

背を向けた方向から何かが潰されるような、とてつもない破壊音が聞こえてきた。

「何だ!？」

驚いて振り返る私達。そこには、フランクフルトの屋台を踏み潰した機械みたいな恐竜のような怪物……所謂

「……メ〇ルギア!？」

版權とか著作権とか諸々を含めて危険そうな怪物がいた。

(グルルルルルッ……)

いろいろな意味で危険な雰囲気醸し出しているソレから、動物独特のうなり声のような音が聞こえてくる。全長にして約5メートルのこれは、どうやら生き物らしい。

(ズシャッ……)

そんな音と共にメ〇ルギアのような怪物が一步踏み出す。若干水音を含んだような音に目を向けると、潰されたフランクフルト屋台から赤い水溜まりが広がっていた。……多分ケチャップだ。

「ひっ 怪獣っ 化物っ お母さんっ」

お化け屋敷でさえ動じない娘が動揺しまくっている。

娘の中では怪物や化物とお母さんは同列の生き物なのだろうか。私もまったく同意見だが……お母さんに聴かれたらお仕置き確定だな。

（ズシヤッ）

また一歩近づいて来た。しかし腰が抜けてしまったのか、娘はその場に座り込んだまま動こうとしない。

（ズシヤッ）

娘を抱えて逃げようと判断するが

「ッ！！」

10メートルはあつたはずの距離は、デカイ怪物の歩幅によって既に逃げる事は出来ない距離にまで詰められてしまっていた。

（グルルルルル……）

1メートルも離れていない所で、怪物が私達を見下ろしている。

咄嗟に娘を庇う様に怪物の前に立ったが、何の意味も無いのでは無いだろうか。

勝算もなにも無くただ父親として、とか浅いこと考えての行動だ。マジ恐え。出来れば逃げ出したいが、守らなければならないヤツが直ぐ後ろにいる。

「だ 大丈夫だ娘よ コイツは俺が引き付けておく お前は早くお母さんの所に行きなさい」

背後に庇った娘を振り返りながらなるべく平静に話しかける。足はガックガク震えている、ばれていないか不安だ。

「はっ えっ でも……っ」

（キシヤアアア！！）

怪物が吼え、私の胴回り程はある太い脚が大きく振りかぶられる。

「心配すんな 早く行け！！」

「お父さん……っ」

覚悟を決めた私の言葉に後押しされるように、娘が駆け出す。

肩越しに娘を見送る。アイツは逃げ足だけは速いから、逃げきれだろうと思う。そう願う。

まあそれも、私がこの怪物をどれだけ引き付けておけるかで変わってくるのだろうか。

（ブーン！）

その音と共に丸太のような脚が迫る。

「グフッ！？」

咄嗟に両腕を前に出し、後ろに全力で跳ぶ。マンガでよく見る回避方法を試してみたが、そんな器用な事一般人の私に出来るはずも無く失敗。ヒューン、ドサッ、ゴロゴロゴロと数メートルを転がり

無様に倒れる結果になった。

「カハッ！ ゲホッ！？ ギ…ギッ」

どうにか生きているようだが、全身が痛くて息が出来ない。両腕の感覚も無い。もしかしたら怪物に蹴られた時にスプラッタな事になったのかもしれないが、どっちにしろもう動けない。万事休すつてヤツだ。

（グルルルルル……）

直ぐそこに怪物の足が見える。トドメを刺す気らしい。有り難い。

「グッ……時間稼ぎ ゲホッ 成功だ 馬鹿野郎っ」

それだけ言って意識が遠のいていく。怪物の脚が私を踏み潰さんと迫るのを最後に私は目を閉じた。

「すげーや白衣さん！ メオルギアじゃね コレ！？」

私のシリアスな覚悟を揺るがすような、どこまでも呑気な声が聴こえてきた。

11『一般人を書いていると、どんどんキャラが濃くなっていく』(後書き)

お帰りなさいませ。

この小説はなんだかんだでぐだぐだと続いています。

投稿遅くても心配しないで下さい。終わるまで続けますんで。

ではまたの機会にお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5669x/>

秘密結社の日常的侵略行為

2012年1月14日15時45分発行